

浄土

monthly
JÔDO

2013
October

10



2013
年『浄土』表紙の人

佐野芳朗



佐野 芳朗（さの よしろう）

走馬灯に手を翳しながら…

1939年愛知県は尾張瀬戸市、瀬戸焼の町に手打うどん屋の次男として生を受ける。瀬戸窯業の工芸を専攻、ノベリティーデザイナーに就く。

1962年上京、グラフィックデザインを学ぶ。

傍ら岡本太郎のアトリエで「かの子文学碑」ほかモニュメント製作に参加。

二科展デザイン賞、パフォーマンスとして「1000円作品展」活動 等。本邦初の「ボランティア」誌 40数年間製作。

全日本ろうあ連盟「絵で学ぶ手話」連作。

同時期、正力松太郎氏提唱の-全国青少年教化協議会-「おしえの泉」「びっばら」等の製作に協力。

最近は機関誌『浄土』にお招きをお受けております。
淀みの川を流れつ…

合掌

浄土

2013/10月号 目次

日本の仏教（最終回）	梶村 昇	2
会いたい人 勘三郎の会った人々（下）	関 容子	14
響流十方	林田康順	24
連載小説 渡辺海旭	前田和男	28
江戸を歩く	森 清鑑	36
誌上句会	選者＝増田河郎子	44
マンガ さっちゃんはネッ	かまちよしろう	47
編集後記		48

表紙・表紙裏＝2013「浄土」表紙の人 佐野芳朗

背表紙裏＝泰雲の美味探訪



表紙題字＝中村康隆元浄土門主
アートディレクション＝近藤十四郎
協力＝迦陵頻伽舎

講演概録「日本仏教讃仰会仏教セミナー」

日本の 仏教

梶村昇

亜細亜大学名誉教授

第三
回

日本の葬式仏教批判に対して

日本の仏教はよく悪口を言われます。葬式仏教だと。これはいつごろから言われ始めたのか調べてみますと、江戸時代に既にそういう悪口があったようです。たしかに言われるだけのこともあるのですが、悪口を言う根底は何かというと、日本の仏教はお釈迦様の仏教であるべきだ。お釈迦様はお葬式なんかしなかったというのです。それはそのとおりです。しかし、それはお釈迦様の仏教なのであって、日本に入ってきたら日本の仏教なのです。

柳田國男さんの『先祖の話』を要約しますと、

日本人は昔から、人は亡くなると靈魂、魂、たまとなって山に帰り、あの世とこの世とを自由に行き来しながら、先祖という靈体に溶け込んで、ふもとの子孫を見守ってくれろと信じてきた。これが仏教が入る前の日本人の、ここで言う民族の三つ子の魂、根っこの宗教なのです。それが仏教を変容したのです。

今も日本人の仏教は、お盆で亡くなった先祖の魂が、家の仏壇に帰ってきて、お盆が終わるとまた送っていく。この民族の三つ子の宗教と同じじゃないですか。このように、日本の仏教というのは祖先崇拜仏教なのです。

タイ国では祖先というのは、サンブラブーンに入っている。日本では仏教と一緒にあって、祖先崇拜仏教となった。

先ほど、日本の仏教は江戸時代から葬式仏教だと非難されたことを申し上げ、私がある程度頷いたというのは、それにばかり傾いているからです。仏教の本来の仕事を忘れて、その祖先崇拜仏教ばかりに傾いているから、そういう悪口が出るのです。

しかし、その悪口を言う人も反省しなければいけない。なぜかというと、日本に入ってきた仏教が、お釈迦様の仏教そのままでなければならぬと思っているからです。そんなことはありません。お釈迦様の仏教はアジア、全世界に今広がっていますが、皆広まったところ、広まったところで違っていきます。

私はニューヨークに三年間おりました。ニューヨークでは仏教が盛んです。しかし、どういうふうに盛んかというと、人々はお寺に行つてちよつとの時間ですが坐禅するのです。お寺と言つたつて、アパートの一室です。ですけども、そこへ行つて坐禅をする。心が静まつて、非常にいいということです。

要するに、ニューヨーク人の仏教の受け取り方というのは、精神を静めるためであり、これはアメリカ的な受け取り方なのです。それを悪いとも何とも言えません。

日本は日本的に受け取つた、そして、祖先崇拜仏教になつたのです。ただ、私が頷いたというのは、日本のお寺さんは今、お葬式に傾きすぎているからです。それはいけない。だから非難されるのだということなのです。

しかし、そういうふうな宗教というのは、受容されたらその土地、土地で変わっていくということ、それが現実の姿です。

その次、四番の二階建て宗教構造はどういうことかについてお話します。仏教が日本に入ってきました。公伝、仏教の受容の年というのは、今まで『日本書紀』によつていたの

ですが、『日本書紀』の記述では西暦でいいますと五五二年です。しかし、それはほかに根拠がどこにもないのだ、『日本書紀』の歴史の数え方がちよつと違うのだという、そういう非難がありまして、今それは使われず、五三八年ということになっております。

そして、ご承知のとおり、聖德太子は仏教の心によって政治をしようとしました。それが憲法十七条であり、『三経義疏』です。

ところが、そのあとに大化の改新が来るでしょう。一般に私たちが学校で習うことというのは、大化の改新は聖德太子のお心を受けて仏教を広めたということです。それはそうかもしれませんが。しかし、はっきり言うと、大化の改新は仏教の形だけをまねして、形を大きくして、内容が伴っていない、それは形骸です。

「内容を伴わない形式の繁栄は皆、形骸にすぎない」。我々はやはり内容を伴わないといけないのです。ですから、大化の改新は聖德太子のお心を本当に生かしたとは思わないのです。

その後、奈良時代、平安時代、たしかに仏教は盛んになりましたが、しかしこれは、内容を伴わない形骸仏教だったと言わざるを得ないのです。

この二階建て宗教構造というのは、大化の改新、あるいは奈良仏教、平安仏教は、二階にあがってしまつて一階に庶民がいるという構造です。そして一階と二階をつなぐ階段がない。二階に仏教が入ってきて、ここで仏教の研究がされた。

その証拠に、奈良仏教、平安仏教の論文を読んでごらん下さい。難しいことばかりを論じているのです。ですから、庶民から見ると、仏教は二階にあつて、難しいことを研究し、難しい修行をして、大変なものだと庶民は思ったのです。

庶民はどうかというと、昔からの根つこの宗教です。庶民は根つこの宗教の続きであり、仏教界は伝来してきた仏教の教えを研究している。これが平安時代、奈良時代の日本の社会の姿だったと思います。それが二階建て宗教構造です。

平安時代の末に法然上人が登場し、二階から一階にはしごをつけて下りていったのです。法然上人という人は長い日本の仏教史を二分した人です。法然上人以前を前期仏教、法然上人からあとを後期仏教としています。ですから現在我々は後期仏教に属しているのです。後期仏教はもう八百年も続いているのです。

二階でやっている仏教は、難しいことを説いているけれども、そこには救いがあります。例えば、仏教では戒律を守れと言います。第一は、生き物を殺すなと言います。そのとおりです。理屈は何もありません。生き物を殺してはいけません。しかし、蚊がとまって、生き物を殺すなと言って、殺さずにおりますか。ふうつとしたり、ぺんとたたいたりします。

我々はいろいろな食べ物を食べて生きています。食べられる側にとってごらんなさい。皆これ、生き物です。生き物で人の命を保つ。食べて、そしてこちらの命を保っている。人間はそういう罪深いものです。そういうことを思えば、それは理屈で済むものではないのです。

そうしますと、いかにこの二階の仏教界で難しいことをおっしゃったり、難しいことを研究されても、それは実行できないこと、それが奈良仏教、平安仏教の至り着いた姿でした。だから、研究は研究なのです、研究者と研究される者と別物なのです。

仏教の教義は難しいです。私も七十年、この年まで仏教の研究をしていて、ほんの一部

やっているだけにすぎない。難しいのです。それをこつこつやっているのが二階の仏教界でした。

しかし、それは実践できない。言うだけなのです。法然上人はそれを、「私にはそんなことはできません」と言ったのです、はつきりと。それが日本の仏教を二つに分けた。要するに、理屈ばかりの仏教と、自分の体に身についたものに分けたのです。

自然に帰す

現代人は八百年続く後期仏教に属していると言いました。現代人もいろいろ言いますよ。マスコミなんか、見てごらん下さい。「宗教とは何か」とか「宗教は日本を救えるか」とか、そういう特集をよくやります。

私も職業柄、出るたびにそれを読みますが、結局同じことを焼き直しているだけ、言っているだけ。救えることなら、とうの昔に救っている。ただ言っているだけ。そういう仏教を、これではだめだ。私には何もそれはできないと言って、自分の身に引きつけて考えた。それが法然仏教です。その弟子で、そのとおりと感激したのが親鸞聖人です。

二階建て宗教構造に、階段をつけたということだと思ふのです。南無阿弥陀仏と申せば、仏の国、阿弥陀仏の国に往けるのだ、往生できるのだと、それが法然上人の教えです。

しかし、皆さん、阿弥陀様の国というのがあるということの本当に心の底から信じますか。そのことを聞きたいのです。自分は信じられないのに、法然上人がそうおっしゃって

いるから、だからそう言っているのだと。それでは話にならないです。うそを言わずに生きてほしいということです。

法然上人の時代は大変な天災地変のあったころです。『方丈記』や『平家物語』に書いてあるように、火事はある、風は吹く、大変なのです。そういう時代ですから、法然上人は心の底から阿弥陀仏の国ということを信じたかった。それを私は疑わないし、それはそれでいいと思います。

法然上人の言葉に、「いけば念仏の功つもり、死なば浄土へまいりなん。とてもかくても此身には、思ひわづらふ事ぞなきと思ねれば死生ともにわづらひなし」というものがあります。

生きていれば念仏を申して、南無阿弥陀仏と唱えれば仏の国に行けると信じて南無阿弥陀仏と申す。それが、いけば念仏の功です。死なば浄土へ、死んだならば阿弥陀様の国、浄土にお参りする。とてもかくてもこの身には思ひわづらうことはない。

生きている間は南無阿弥陀仏、死んだら極楽浄土へ行く。「ああ、思ひわづらふ事ぞなき」と思ったら、もう死とか生とか、そんなこともわずらいはないということです。これが法然上人のお言葉です。だから、極楽浄土へ行く、そう信じられる人は信じてください。そして念仏を申す。それでいいと思うのです。

先ほどから今日の話の一番先に、最後の結論はこうだと申しましたように、私はそれぞれ皆さんの、法然上人の南無阿弥陀仏と申せば極楽へ行ける、そう信じた。だから極楽浄土というものはある。

ところが、現代人は極楽浄土なんて信じられないと言う人もいます。その迷いに迷って

いる人はどうなるのでしょうか。

皆さんご承知の、

「山のあなたの空遠く 幸い住むと人の言う

ああ、われ人と訪めゆきて なみださしぐみ帰りきぬ」

これは有名なカール・ブッセの詩です。

私はこれを読むとつくづく自分の生涯を思うのです。山のあなたの空遠く、幸いがあると思って、仏教を求めて今日に来たのです。ああ、われ人と訪めゆきて、それを訪ねていった。そして、涙さしぐみ帰りきぬ。幸いに会えなくて涙を出して帰ってきた。

しばらくすると、また山の彼方の空遠く、幸い住むと思って訪ねて行って、また涙さしぐみ帰りきぬです。そういうことの繰り返しをして今日まで来たような気がするのです。

もう私の人生も残り少ないですから、今本当のことを言わなければ、もうチャンスはないのです。だから本当のことを言いますが、涙さしぐみ帰りきぬです。

ちょっと余計な話ですが、これはカール・ブッセの詩を、上田敏という人が明治三十八年に訳したものです。この前、詩人の川崎さんという方がベルリンのこのカール・ブッセの生まれた近くの大学へ行つて話をしました。そうしたら、地元の人々は皆カール・ブッセなんているのは全然知らなくて、ぽかんとしていたというのです。それで、言っている当の本人が啞然としたというのです。そんなものです。カール・ブッセは日本でこそ有名だけれども、ドイツでは知られていないのです。

中外日報という仏教の新聞があります。それをつくった真溪^{またいこ}涙骨^{なみだほね}という人の言葉ですが、「人生はただあるがままの流れだ。愛憎違順そのままが、愛したり憎んだり、そのままが

自然の展開だ。あのときはあれでよかった。このときはこれより仕方ないのだ。こだわるから愛憎があり、こだわらなかつたらただ流転があるだけだ」と。この真溪涙骨という人が本当に心の底から真実を生きた人です。

岡野さんという歌人がいらっしやいますが、その人の言っていること、「地震や津波は火山列島に住む日本人の宿命です。しかしその火山列島が育む自然の中で、古来日本人は、海や川、生き物を祀り、四季の風景に心を癒されてきた。自然と優しく付き合い、心も体も自然にゆだねる生き方が、この火山国で生きる命を支えてきたのだと思います。この生き方は一見頼りなく見えるけれども、意外に強いのではないかと思います」と、自然に従うということです。

瀬戸内寂聴さんという人がいます。その人の言葉がこのあいだ『文藝春秋』に載っていました。「私は、切に生きるということを伝えたい。生かされている私たちは何をするべきか。私は道元のこの言葉が好きです。世の中は儚い。空しいものです。どうせ生きるなら一瞬一瞬を切実に生きていく。一所懸命に生きる」

「私はあの世を信じています。だから死は怖くない。やっと来たかと、あの世の人は迎えてくれると思う。いったい誰に最初に会うのだろうとも考えます」

瀬戸内寂聴さんというのは八十幾つでしようか、私と同年くらいだと思っています。あの世へ行つて最初にだれと会おうかと言っているのです。

僕は今、いろいろな人の話をしたのですが、皆いいのです。そのとおりだと思ふのです。私は先日、お墓をつくりました。そして、そこに墓石をつくつて、「梶村家之墓」と普通書くのですが、「自然に帰す」と書いたのです。この自然に帰る、私は今そう思つてい

るのです。亡くなったら土に入って、そしてこの自然に帰るのです。今私はそう思っているのです。「仏に従い逍遙して自然に帰す。自然は是れ弥陀の国なり」、これは善導大師というお坊さんの『法事讃』という本がありまして、その中に出ている言葉ですが、仏に従い、仏の教えに従って、「逍遙して」というのはぶらぶら歩くということですが、人生を生きていうのです。

仏の言葉のとおりに生きる。そして最後は自然に帰って、自然はこれ、阿弥陀様の国だと言うのです。ですから、私はお墓に「自然に帰す」と書いたのです。

私は今、この教えでなければならぬとか、あるいはこうでなければならぬ、そういうことは申しません。みんな同じになるわけじゃないですから。

だから、皆ご自分で、これはこうだと信じていけば、それで結構、法然上人は念仏を申して阿弥陀様の国へ行く。それはそれでいいのです。親鸞聖人はその教えを受けて、そのとおりだとおっしゃった。皆それでいいと思うのです。瀬戸内寂聴さんはあの世があると言う。

内閣総理大臣をやった中曽根さん、あの人が本の中でこんなことを書いています。中曽根さんが東大の学生のころです。学年末試験で一生懸命やっていた。そのときにお母さんが亡くなりました。群馬の方です。

お母さんが言った。「息子は今年年末試験で一生懸命やっているから、私の亡くなったことは言うな。試験が終わってからでいい」と。でも中曽根さんはそれを聞いたのでしう。愕然として、東京から飛んで帰ったそうです。そうしたら、もうお母さんは亡くなっていて、間に合わなかったのです。

そういうことを中曽根さんは今でも思っている。あの天上にある星、あれが母親だと。星を見ては母親を祈っていると、こう言っています。僕はそれでいいと思うのです。それが中曽根さんのお母さんに対する孝養だと思っています。皆それぞれでいいと思うのです。ただ、私たちの至らないところは、先ほど申しましたように、開悟徹底しないことです。今はそう思いながら、明日すぐ、どうしようかなと迷う。ふらふら、ふわふわしている。それが我々の凡人たるゆえんだと思うのです。

ただ一つ申し上げたいことは、人の力を超えた大いなるものがある。なんでも人間の力でできると思うことは間違いであるということです。人間の力でできるものは、それで解決すればよい。しかしそれではどうにもならないものがある。お互い、自分を振り返ってみればすぐ分かるように、自分の人生、この世の成り行きは、人間の力ではどうにもなりません。すべて思った通りに運んできたなどと言える人など、一人もないはずです。人間、明日のことも分かりません。なるようにしかありませんし、なるようになっていくでしょう。とすればそれに随って生きていくほかありません。人間を超えて大いなるものがあるということです。

(了)

梶村 昇 著.....大東出版社

梶村昇先生待望の近著

法然上人伝《上》《下》

《上》3,570円

日本仏教史上、初めて称名念仏という誰もが
行え誰もが救われる道を示した法然上人。歴
史の教科書に見られる「新・旧仏教の過渡的
な存在」という誤った認識を正し、「悪人正
機」をも説いた真実の法然像を、その生涯を
辿って明らかにしていく「法然上人伝」の決
定版!! 《上》は、誕生から、浄土宗開宗、
教えの宣布までを辿る。

《下》3,456円

日蓮聖人に「日本国皆一同に法然房の弟子と
見へけり」と、一休禪師に「伝え聞く、法然
は生ける如来と」と言わしめた法然上人。真
実の法然像が明らかにされる「法然上人伝」
の決定版!! 《下》は『選択本願念仏集』執
筆から、法難、臨終を辿る。



連載

会いたい人
関 容子

特別編

勘三郎

の
出会った

人々

下



勘九郎襲名披露パーティーでの勘三郎さん

勝新太郎

麻薬事件の裁判前日、勝新太郎は歌舞伎座に来て当時勘九郎の『髪結新三』を観た。そのことにいたく感激している中村屋は、『C R E A』の対談ゲストに勝さんを希望する。

長唄三味線方の杵屋勝東治を父として、深川に生まれ育った勝新太郎は根っからの歌舞伎好き。まだ杵屋勝丸と名乗って三味線を弾いていた時分から、浅草松屋のスマタ劇場で(多分、邦楽の人たちの道楽芝居)『忠臣蔵』五、六段目の勘平を演じたりしていて、私はそれを観ている。妙に甘ったるいマスクでござって、あまり素敵と思わなかったもので、とうとうその話は中村屋にしないで終った。

対談ではもっぱら『髪結新三』の新三と忠七でやりとりしたり、そのうち本式の芝居ごっこになって大人同士が楽しげに遊んでいる。

勝さんが言う。

「何しろ俺は六代目菊五郎がお父さん(先代

勘三郎)に稽古つけてるところまで見てるからね。六代目が金メダル、お父さんが銀メダルとして、この間観た『新三』は銀メダルに近かった。六代目の跡取りは勘九郎だって俺、前から言ってたからね。もしかしたら金メダルだったかもしれない」

中村屋は照れながら、崇拜する祖父六代目の話に身を乗り出してもっと聞きたがる。

「たとえば『そんならすぐに、チョン、行きやしよう』、そのチョンのところが六代目はほんのちよつとの間なんだね、これがいいんだな。だってさ、芝居の筋なんか見てるやつなんか誰もいなくて、役者の『遊び』を見に行ってるんだから。一生懸命やられちゃったらつまらない。まあ、芸のないのに遊ばれても困るけどな。歌舞伎は一つの道楽だ。世の中、いろんな道楽があるけど、一番いい気持ちになれるのが役者の道楽。舞台に立って、好きな芝居をやって、客の視線を集めて。もうこんな道楽をしたらやめられないよ。その

道楽を客は金払って観に行く。だから一生懸命やってもらったって、困るんだよ」

と、かなり高度な演技論に発展していく。若かった中村屋はこれにはつきりとした受け答えをしていないが、最後の平成中村座で演じた法界坊やめ組の辰五郎や髪結新三などは、まさに演技を超越した遊びの境地に達していて、観客は無心なその姿を眺めて心がなごみ、満ち足りた気分で帰れた気がする。

この対談で、中村屋はこう言っている。

「うちの親父は、僕が生まれてからはお酒が飲めなくなっていましたけど、でも飲めてたらきつと勝さんと同じことを言ったと思いますよ。こうして聞いていると、死んだ親父と話しているような気がします」

三木のり平

中村屋はこの対談の席にラジオ番組『大人の幼稚園』（園児役が三木のり平、先生役が七歳の勘九郎）の録音テープを持参して、一

緒に聞く。

いきなり元気な少年の甲高い声が流れる。「七時四十五分だよ!」。続いてテーマ音楽。「勘九郎先生、おはようございます」「おはよう」「先生はこちらには自動車でいらしたんですか」「あのねえ、ここから近いですからね、あるって来た」「あるっていらしたんですか」。ある、つてという言い方がいかにも元気澁刺な子供らしい。

「今思うとよく図々しくこんなことやりましたね。生意気なガキだと思ったでしょう」

「いやいや。しかし小憎らしくて、こつちも忙しいのに冗談じゃないよ（笑）。喉が乾いたから、つて飲み物出すとこれじゃいやだ、あれじゃいやだ、つて言つて、何時間も待たされたり、今日はスタジオへ行きたくない、と先生がおっしゃると僕が麹町のお宅へ行ったりね。でもこの番組は面白かった。ほとんど動物園のパンダとしゃべってる気分でやりましたけど（笑）」

「ジャンルは違つても、うちの親父と三木さんと藤山寛美さん、どこか似てると思う」

「うん、似てるかもしれない。客の呼吸を見ながらやったりね。落語の志ん生さんもそうだね。みんな、客の心をつかんだなと思つたらもう離さないからね。昔はお宅のお父さんと二人でよく飲み歩いて、世の中に対して怒つてたものでしたよ」

と聞いて、中村屋は父親が亡くなつたとき、三木さんが泣いてくれたことを思い出して感謝する。

「そのころ飲みに行つても遊びばかり。都々逸、小唄、端唄、みんなお遊びのお座敷から生まれた。そういう遊びを普段からやっていた時代なんですから」

「うちの親父は三味線もうまかつた。僕が弾くと固い芸になつちやうけど、親父のは舞台の上でその役になり切つて弾く。ああ、この人は遊んでるな、つていうのがよくわかりました。でも僕ときたら、もっぱら遊ぶのはフ

アミコンですから」

と反省しているが、そんなこともなかった。ところで、晩年の先代勘三郎が『盲目物語』の按摩弥市の役で、三味線を弾きながら歌うのを私は聞いたことがある。本当に盲人が歌っているようでした。手探りで歌っているようで、何か自信がなさそうで、哀れで……と言うと、先代が

「盲目声、つてのがあるんだ。そう聞こえたんなら嬉しいね」

と喜んでくれたのを思い出した。

三木さんが言う。

「僕は悪口が好きなんだ。あれは気持ちいいです。陰口はダメで、面と向つて言う悪口。心をこめてけなすんだ。ここが難しいところで、面白くなくちゃいけません。劇評でもただ『欠点めつけ!』というのが多いからね。僕は今の菊五郎さんにも團十郎さんにも言いましたからね」

すると中村屋はしみじみと相手を見て、

志ん朝師匠が亡くなられる前年の平成12年、イタリア料理店で会食する古今亭志ん朝さんと勘三郎さん。



「三木さんていいよなあ。俗世をよく知っている仙人みたいで。近ごろ『偉くなりたい病』の人が増えてますから、そつとそばへ寄って行つて、回りから祭り上げられてるだけじゃないの? とか言つてやつたりしたら、ほんと、いいよなあ」

と立派に成長した元パンダは、大先輩の仙人を改めて尊敬するのだった。

古今亭志ん朝

志ん朝の江戸前で派手でトントンと運ぶ、粋で正統的な高座が大好きだった私だが、ときどき商業演劇などに出ていることをちよつと不満に思つていた。

あるとき、親しくしている柳家小満さんからこんな話を聞いた。まだ小満さんが、黒門町の名人桂文楽の弟子だったころのこと。

「師匠のお供でお茶を飲んでいたときに、向うの席に三木のり平さんがいたら、師匠がツカツカと寄つて行つて、『志ん朝は落語界に

とつて百年に一人の大事な男です。いつかきつとこちらへ返してくださるよう、お願い致します」つて頭を下げて戻ってきました」

そこで私は中村屋と志ん朝師匠に、お互いの芸とそれぞれの父親について語り合ってもらうことを思いつき、これは『文藝春秋』（平成十一年九月号）に載った。

まず志ん朝さんが言う。

「あたしは中学校のころから歌舞伎見物に凝りまして、演劇雑誌の写真見ちゃあ役者の絵を描いたりするのを親父（志ん生）が見て、いやな顔をしてましてね。自分は播磨屋（初代吉右衛門）の何かの集りに招かれて一席つとめたなんて自慢げに話すから『父ちゃん、ちよつと口きいて役者にならしてくれよ』つて言うのと、『それはダメだ』つて。家柄のことを言つてたんでしょう。当時は夢中でした」次は新国劇に、と言うと「怪我するからダメ」。新喜劇に、と言うと「大阪の人でなきゃ入れない」と全部つぶされたそう。

中村屋は、「もし師匠がこつちへ来てたら、俺の好きな役を全部先にやられてるね、『文七元結』とか、『髪結新三』とか。来なくてよかった」と受けるが、これは社交辞令というもの。名門の御曹司でなければいきなりそんな役がつくはずはない。それに志ん朝さんの滅多にない才能は落語でこそ生かされるものと、父志ん生は見抜いていたのだろう。それでもなかなか舞台の夢を捨て切れずにいて、ようやく思いを叶えてくれたのが三木のり平だった。

志ん朝さんが中村屋父子の芸を分析する。

「あなたが絶対にお父さんの血を引いているのは、どこを取つてみてもわかるよ。まず舞台がそう。何かおかしみがある。出てきてふつと首を動かしただけで、もうおかしいんだ。愛嬌というか味というか。そういう人つてあまりほかにいない。子供がすつかりその気になつてやつているのと同じなんだね。だから観ていてホツとさせられる。これがすごい」

と鋭いところを突き、先代の『巷談宵宮雨』

の破戒坊主龍達がじつによかった、毒入りの鯰鍋食いながら小骨ブツブツと出して、文句ブツブツ言つてるところなんか……と言う。

すると中村屋が父親の意外な面を暴露。

「あの欲張り坊主の役ね。うちの親父が金貯めてんですよ。仏壇のところに打出の小槌型金庫があつて、毎朝あたりを見回しちや金数える。まるで龍達なんだ（笑）。そうしてるうちに金庫のあけ方忘れて、金庫屋を呼ぶ」

先代のために弁明すると、お金をためていたのは自分の立派なお墓を買うためだったようだが、「打出の小槌型金庫」というのがいかにもおかしい。

すると志ん朝さんが、昔の男は自分が財布を握つていて、母親が「今日はこれこれでお金があるの」と言つと、「うん」つて胴巻から取り出してその分だけ渡す、という暮しだったから、別にそれがケチとかしみつたれとかいうわけじゃない、と解説し、二人の得意

ネタ『文七元結』の話になる。

まず中村屋が言う。

「ケチの半面、左官長兵衛みたいに、自分の娘をカタに置いてきた五十両を、見ず知らずの若い男にポーンと投げ出して身投げを止めてやつたりする。そのあとで後悔するんだだけだね。江戸っ子のバカさ加減なんですね」

「うちの親父（志ん生）のもそういう長兵衛でした。つい、金をやつちやう長兵衛」

「私生活でも発作的だからね（笑）」

「そう、こまつけえところはすく細かくて、でっかいことになると発作的になる。その意味でも長兵衛はお父さん（先代勘三郎）と三木のり平さんがよかつたね。吉原の角海老に入つてくるとき、自分が仕事した廊下の壁を改めながら歩いてくる長兵衛なんて、理に詰みすぎる。そんな人が博打で借金だらけになるわけがない。のり平さんのは、幕切れに足が痺れてよろけてポーンと壁に手を突いたときに初めて見て、こゝも塗り直して参ります、

つて言う」

「なるほど、最初はそんな余裕はないからね」「いいねえ。こんなこと言つてられるんだよ、われわれの商売は。人間を突き詰めて、楽しいじゃないですか。結構な生業なりわいですよ」

それから中村屋が聞き役になつて、もつぱら志ん生師匠のエピソードになる。

「お父様が高座で寝ちゃつて、お客が『寝かしといてやれよ』つて言つたつて話、ほんとうですか。僕好きな話なんです」

「ほんとですよ。お座敷で一席伺つて、『お疲れさま』つて酒出されると、よしやあいに飲むんだね、これが」

「ハハハハ、そりゃ飲むね」

「キューツと飲んで寄席へ着くと、そのころにいい心持ちになつて、高座へ上がつてるうちに、ウーン、つてことに（笑）」

志ん朝さんの「ウーン」という声は、酩酊したり、困ったり、感心したり……いろんな場面をよく聞いたが、今となつてはなつかしい。

「前座が出てきて、『師匠、師匠』つて起こす。そしたらお客が『寝かしといてやれ』つて」

「粋な客だね」

「親父が目えさまして『そういうわけで』つて（笑）。いい度胸というか、好きなように生きてきたというのが羨ましいですよ。晩年、患つてからは右半身がきかなくなつて、『父ちゃん、もういいよ』つて言つたら『俺は出られるだけ出るんだ』つて。でも脇で聞いて、ああじれつたい、と思うわけですよ。」

それからだんだんうちにいることが多くなつて、うちの庭に池がありましてね。こつち側は水がなくて砂利だけという、ちよつと凝つて気取つた池なんです。このたもとにあつた梅の木が枯れたんで、植木屋が適当な高さに切つて、そこに板を打ちつけて植木鉢を置く台をこしらえた。その板は水面にぐつと張り出して、下に金魚が泳いでる。ある日、その板に鳩が来てとまつた。そしたら日向ぼつこしてた親父が弟子を呼んで、『見な、あ

平成24年2月、新橋演舞場楽屋で、鈴が森の白井権八役の勘三郎さんと関谷子さん。
これが二人の最後のツーショットとなった。



の鳩が何考えてるかわかるか』って「

フフフフ」と中村屋が笑う。

『あれは身投げしようかどうか、考えてんだ』って（笑）。俺、好きなんだ、この話。

鳩、こうして首左右に傾けて考えるでしょ。下には水があるし。芝居こころと嘶のエッセンスがつまってるね。勝手に人間が鳩の了見

になって言ったりしてさ」

やがて二人が父親から芸をどのようにに受け継いだかの話になる。まず志ん朝さん。

「手ほどきは林家正蔵（のちの彦六）師匠。うちの親父の話はブロークンですけど、正蔵師匠のはピシッと決まってますから、三回聞かしてくるんですが、三回ともキチンと同じ。すると嘶というのはこうなってるって進んでゆくんだな、ということがわかってきて、それから親父のを袖で聞いてて、自分でこなせるようになりました。親父のはやるたんびに違う『隠居さんいるかい』って入ってきたり『隠居さんの前だけど』っていきなり始めたり、隠居のほうから声かけたり。それはどうでもいいんだ、っていう教え方で、初心者には難しいですよ」

すると中村屋も大いに思い当る。

「ああ、そういう教え方。うちの親父もともに僕に教えるのをいやがって、麻雀つきあえば教えるとか、負けたらもう取りやめ。途

中で僕が指さしたりすると、親を指さすよう
な了見のやつには教えない、つて、まるで子
供みたいですよ。だから幸四郎さんとか吉右
衛門さんに教えてるのを横から見ておぼえま
した。とにかくお客の前で恥かいてやつてれ
ば、ある日あるとき、こういうことか、つて
のが来る、つて。まだ来ないけど」

「いや、来てますよ」

先代勘三郎は、亡くなるときの病院ですつ
と志ん生の嘶のテープを聞いていたので、中
村屋はお棺にそのテープを入れ、あとでふと
考えたら「何だ、向うで本物が聞けるんだ」
と思ったそうだ。

「芸人というのは、お父さんもうちの親父も
そうだけど、最終的に芸を見せるんじゃない
て、その人間を見せるんだ、ということだす
ね。落語も芝居も、それは媒体で、その人
を見せるんじゃない。誰のを見ても同じわ
けですよ。役以外の本人の魅力を見せたのが

親父やお父さんだったと思う」

中村屋は、「とてもよくわかる。最後は人
間なんだろね」と受け、ちよつと照れながら、
「僕は『牡丹灯籠』という芝居の中で、おこ
がましくも三遊亭圓朝の役をやつて、しかも
志ん朝師匠が観に来てくださるというすごい
ことをやつてのけた」と言うと、志ん朝さん
も「あたしもあのとき明治座であなたの持ち
役、髪結新三をやつていた。そしたら『髪結
新三さんへ演舞場の圓朝より』つてお花が届
いた」

感激した志ん朝さんが羽織の紐を持つて中
村屋の楽屋を訪ね、さっそく紐をつけかえて
圓朝の舞台をつとめたという。

このとき志ん朝さんは六十一歳で二年後に
没し、中村屋は四十四歳で十三年後に世を去
った。

(この項おわり)

称名の時に心に思うべきようは、人の膝などをひきはたらかして、
や、たすけ給えという定じようなるべし。

（『つねに仰せられける御詞』）

お念仏を称える時、心に思うべきありさまは、例えていうなら、頼るべき人の
膝に揺さぶりがつて「どうか、どうか、お助けください」と懇願するようなも
のです。

助け給え、阿弥陀仏——心に思うべきありさま——

去る八月一六日の早朝、一本の電話が入りました。

「K・M君が倒れました。非常に危険な状態です！」

電話で告げられた名前は、奉職している大学において、私が部長を務めている柔道部の学生で、次期を担う三年生の中心選手でした。K君の以前からの持病が発症して倒れたということで、長野市内で行われていた合宿最終日の出来事でした。にわかには信じるのができないままに、各方面と電話のやりとりをしている内に、このことが現在進行形で起こっている紛れもない事実であるという、言いようのない切迫感がつのってきました。

当日の午後、依頼されていた施餓鬼布教を終え、急いで長野市内の総合病院に駆けつけました。病院に到着した時、時計の針はすでに八時を回っていました。夜間入り口で出迎えてくれた監督に詳細を伺い、監督と共に、手足を消毒して集中治療室に入ると、すでにご両親と二人のお兄さんが到着していました。ご家族は、K君を取り囲み、K君の手や腕を握り、頭や顔をなでさすり、足に取りすがりながら、「K！頑張れ、K！」「K！負けるんじゃないぞ、K！」「K！目をさまして、K！」と口々にK君の名前を呼んで、励ましの言葉をかけ続けていました。K君は全身をチューブや計器に覆われ、ところどころから

血が漏れ出ていましたが、その顔は、静かに眠っているかのようなでした。

監督と私も、K君の手を握り、腕や足をさすりながら、「K！今度の試合に出るんだろ、負けるな、K！」「K君！頑張れ！みんなも待つてるぞ、K君！」と、精一杯、K君の名前を呼んで、K君に声をかけ続けました。K君の病室に入って、二、三〇分ほど経ったでしょうか。K君の心拍数が低下してきたことから、監督と私は、病室を出て、廊下で待つことになりました。三〇分、一時間、刻一刻と時計の針は進んでいきます。K君が倒れた時、とまどいながらも、適切な処置を精一杯してくれた、同室の仲間達も、宿舎から駆けつけてくれました。彼等は、K君と三年間、共に切磋琢磨してきた同級生達です。「どうぞK君を助けて下さい！」と、私は心の中で祈り続けていました。

廊下で待つこと、およそ二時間、看護師さんから声をかけられ、病室に入ると、すでにK君は息を引き取っていました。二〇年という短いK君の生涯でした。私は、霊安室に運ばれたK君のご遺体（ご遺体）を前に、掌（てのひら）を合わせ、「どうぞK君をお救い下さい！」という思いを込めて、静かにお念仏を称えました。

八月二一・二二日、K君の通夜・葬儀がしめやかに勤められました。K君が小学生の時から練習を積み重ねていた時も、高校時代、県代表として全国大会

に進んだ時も、そして、これからも着続けるはずだった道着を身につけた姿での悲しい別れとなりました。葬儀は他宗の次第で執り行われたので、私は、浄土宗僧侶の仲間と共に、棺に眠るK君の遺体にご親族と会葬者が花を供え、棺の蓋が閉じるまでの短い間でしたが、こみ上げる涙をぬぐいつつ、「どうぞK君をお迎え下さい！」という思いを込めて、お念仏を称えておりました。K君の棺の際、「K！K！」とK君の名前を呼び続け、崩れ落ちるお母さんの姿は、私達とK君の別れの悲しみをより一層強く刻み込むこととなりました。

法然上人は「それ朝あしたに開くる栄花は夕ゆづの風に散り易く、夕に結ぶ命露めいろうは朝の日に消え易し。これを知らずして常に栄えん事を思い、これを悟らずして久しくあらん事を思う」（登山状）と、諸行無常の道理を弁わえずに、永遠に続く栄耀栄華や際限のない寿命を欲してしまう私達の愚かさに速やかに気付き、お念仏の日々を送るようにと諭されました。K君との突然の別れを通じ、無常の理ことわりを改めて思い知らされた私は、K君のご家族がK君の名前を精一杯呼び続けていた姿を通じて、阿弥陀さまが「わが名を呼べ」と本願に誓われた尊さに感謝すると共に、不安に苛さまれ、揺れ動く私達の心を察知して、冒頭のご法語を教示された法然上人の優しさに改めて感服させられたのです。

台掌（林田康順）

小説 快僧渡辺海旭

壺中に月を求めて

前田和男

第四十五回

第二部

ライン
来江の古城遥かなり

碧眼の比丘、ニヤーナティロカ その4



仏教受容は印象派と浮世絵の 関係に似ている!?

渡辺海旭は、碧眼比丘・ニャーナティロカのかくも長き得度への道程を聞くほどに、仏教へのアプローチが自分とはこうも違うものかと、深い感慨を禁じえなかった。さらに、これは二人の個人の相違というよりも、生活の中で仏教と長く添い続けた一国民と、つい最近仏教を「発見」した西欧先進国のインテリ知識人の受容の違いではないかとも感じた。

ふと、留学中に、浮世絵について、フランス人画学生から機知(エスプリ)混じりに聞かされた話が海旭の脳裏にのみがえった。

日本人は、モネやらマネやらルノワールやら、少々毛色の変わったところではゴッホやら、わが印象派に憧憬を抱いてやまないようだが、そもそも印象派が大いなる着眼を得たのはおぬしの国の庶民の娯楽であった浮世絵といわれている。なんでも、日本から輸入し

た陶器を割れないよう包んであった和紙をほぐしてみたら、それは見たこともない見事な彩色版画で、わが印象派の画家たちは陶器そっちのけでびっくりしたそうなの。というのは、そんなことはいかにもありそうだし、あったらさぞや面白からうという我輩の妄想の産物だが、実際はバリ万博に浮世絵が陶芸品などとともに出品され、フランスの画家たちの間で評判になったのがまあ大方の真実だろう。いずれにせよ、北斎描く波の中の富士山、歌麿描く湯浴みする女、構図の大胆さ、画題の求心性、このインパクトあるデフォルメはいったい全体なんだと。よって我輩の観ずるところ、浮世絵こそわが印象派の産みの親とは言わないまでも、育ての親の一人であることは間違いないまい。それなのに浮世絵を低く見て、印象派を高く持ち上げる日本の知識人どもの絵画趣味を、同じ日本人として、おぬしはいかなものかとは思わぬのか。

フランス画学生のいささかデフォルメのす

きた言説を思い出して、海旭は苦笑いを浮かべた。と、あるひらめきが脳裏に兆して、そうか、さしずめニャーナティロカは印象派の画家で私は浮世絵師かもしれぬ、とつぶやいた。それが耳に届いたらしく、碧眼比丘はビルマでの比丘受戒の回想からさめて怪訝な顔を海旭に向けた。

海旭は窓からの涼風に乱れた法衣を正すと言った。「いや、貴僧の得度までのお話をうかがって、ある喩え話を思い出しまして」

身を乗り出した碧眼比丘に、海旭はフランス画学生の言説をかいつまんで説明してから続けた。

「ゴッホは浮世絵を見てその芸術性に恐れ入ったようだが、歌麿にしる北斎にしる——どちらも先の時代の代表的絵師ですが——私の浅薄な知識では、彼らには芸術作品を世に問うという意識よりも、絵を描くのが得意で注文に応じて好きなままに描いていたという傾きが強かった。ここが貴僧と私の仏教受容の

違いではないかと思ひまして」

「私が印象派、貴僧が浮世絵師というのは、なかなか興味深い喩えだが、その含意は……」

と碧眼比丘は返して先を促した。

「嚙矢は貴国の大哲人ショーペンハウエルでしょうが」と海旭は続けた。「思えば、ヨーロッパの迷える知識人たちは、産業革命という近代化の中で魂の救いをもとめ、仏教のすばらしさに出会い、目覚めた。それはある意味で、浮世絵に触発された印象派の画家たちとも通じるところがあるのではないかと」

碧眼比丘は片手を挙げて話を制した。「なるほど。仏教を浮世絵に喩えるのはたしかに面白いが、少なくともドイツでそれが当てはまるのはショーペンハウエルまでではないですかな。私の年代ではもはや……」

「これはうっかりしたことを」と海旭は額をうって即座に訂正した。「厳密に言うとは北伝、すなわち中国・朝鮮を経て日本に伝わった仏教を『浮世絵』に喩えるべきです。貴僧が提

りどころとされているのは、南伝、すなわちインドからセイロン、タイ、ビルマへと伝わった仏教。これを浮世絵に喩えるのは確かに誤りです」

海旭は、三年ほど前、『欧米の仏教』を書き上げるにあたって調べたことを思い出した。シヨールペンハウエルが火をつけたヨーロッパの仏教ブームにおいて、当初、続々と紹介された仏教関連の著作のほとんどが大乗仏教をベースにしていたが、やがて十九世紀末あたりから南伝の上座部（小乗）仏教への関心が急速に高まる。ニャーナティロカが仏教に惹かれる契機となった菜食主義レストランなどもその流行の一環であった。

ここで海旭は懼れを抱いた、海旭が抱える大乗仏教か、それともニャーナティロカが抱える上座部（小乗）仏教か、の神学論争に入ることは大いなる不毛だと。しかし碧眼比丘もそれを察したらしく言った。

「やれこちらは『大』きい『乗』り物で、そ

うちは『小』さい『乗』り物だのと、その違いや優位性をあげつらうのは不毛の極み。私がかねてから、北伝の仏教がいまも生活のなかに生き続けている日本に行って、この身体とこの目とこの頭でしっかりとつかまえたかった。セイロンやビルマやタイで生きているわが上座部仏教（テーラワダー）に対して、もうひとつの流れとして極東の島国で生きている仏教を確かめてみたいと。諸般の事情で遅延を余儀なくされましたが、今こうしてようやく積年の願いが叶いました。であればこそ、貴僧は北伝仏教を浮世絵に喩えられたが、その浮世絵をじっくりと味わいたい。違いはけっして悪いことではありません。違いこそ、大いなる理解に至る契機ですから」

海旭に大安堵して返した。「まったく同感です。私も望むところです。今晚は、じっくりとお話をしてお互いの理解を深めようではありませんか」

海旭は思った。仏教を浮世絵に喩えたが、

顧みるに、たしかにわが仏門人生は浮世絵師に似ていると言えるかもしれぬ。浮世絵師は絵を描くことが得意で好きだから描く。海旭は、ニャーナティロカのように、少年時代から魂の危機からの解脱を求め続けたわけではない。そんな哲学的命題を追い求めたはてに仏教に出会ったわけではない。実人生の流れで、なんとなく得度したら、仏の道が好ましく向いていると思うようになり、今の自分があるだけだ。それでは、自分が仏の道を好ましい、向いていると思った契機はなんだったのだろうか。

海旭はしばし中空を見やると、まぶたの奥に、ある老婆の姿が浮かんできた。そして、曲がった腰を折れんばかりに曲げて礼を言いながら、海旭の手をにぎった老婆の皺だらけの手のぬくもりがよみがえってきた。

あれは、明治二十年（一八八七）。海旭十五歳の春。当時売り出し中の出版社、博文館の小僧をやめて、小石川初音町の浄土宗の名

刹・源覚寺で、住職の端山海定のもとで得度、渡辺芳蔵から渡辺海旭となって、俗塵の世界から聖なる僧の世界へと転籍したばかりのときだった。

見習い小坊主と 地蔵和讃講釈

源覚寺は、寛永元年（一六二四）、後に増上寺の第十八世貫主となる定誓上人が創建、徳川秀忠、徳川家光も詣でたという古刹である。境内には鎌倉時代の仏師、運慶の弟子の作とも言われる右目が黄色く濁った閻魔像。宝暦年間（一七五一―一七六四）、眼病に悩む老婆がこの閻魔像に快癒を祈って日参したところ、夢枕に閻魔大王が現れ、「満願成就の暁にはわが隻眼を進ぜよう」とのお告げがあり、老婆の眼は治ったかわりに閻魔の目が濁ったという。以来、老婆は閻魔の好物とされる「こんにゃく」を断って、閻魔大王に供え続けたことから、閻魔像は「こんにゃく閻魔」

と呼ばれるようになり、人々から信仰を集めて、毎月十六日には縁日が立ち、海旭が寺に入った当時も参詣客で大いに賑わっていた。

得度してからわずか一月ほどしたこんにゃく閻魔の縁日でのこと。海旭は得度はしたもの、まだ十五歳ということもあり、同年代の頃のニャーナティロカと比べて、信仰への強い確信と希求があったわけではなかった。

その日も、「見習い小坊主」の海旭は雑務に追われていたが、しばしば参詣に訪れる老婆を認めると、足のわるい老婆を介助してこんやく閻魔へと連れ添った。老婆は閻魔の濁った片目を手でふれ合掌してから、つぎは塩地藏へ詣でた。これにも海旭は同道した。この地藏尊は治したいところへ塩をつけるとご利益があるという源覚寺のもうひとつの人氣参詣どころだが、老婆は手にした地藏和讃を広げると、声をくぐもらせながら、たどたどしく誦じはじめた。

「…これはこの世のことならず。死出の山路

の裾野なる、さいの河原の物語。聞くにつけても哀れなり。この世に生まれし甲斐もなく、親に先立つありさまは、諸事の哀れをとどめたり…」

字が判読できないらしく、老婆が途中でつかえると、海旭は老婆の地藏和讃を覗きこんで、老婆を導いて、最後まで唱和し終えた。

「…大慈大悲の深きとて、地藏菩薩にしくはなく、これを思えば皆人よ、子を先立てし人々は、悲しく思えば西へ行き、残る我が身も今しばし、命の終るその時は、同じ蓮の台にて、導き給え地藏尊。両手を合して願うなり。南無大悲の地藏尊。南無阿弥陀仏阿弥陀仏」

さながら眼が見えぬ老母の手を引く孝行息子だった。地べたに頭がつくほどに曲がった腰をさらに曲げて礼を言う老婆に、海旭は言った。「と、刀自は、お子さんを、小さい頃に亡くされたのですね」

老婆は小さくうなずいた。「この和讃を唱

えると、あの子がまぶたに浮んできて…元気で楽しそうにしている頃のあの子が…」と声をとぎらせると続けた。「小僧さん、なんだろうかね。地藏和讃にはなんでそんな有り難いご利益があるのだろうかね…実はろくに字も読めんので意味がようわからんのだが…意味がわかればもっとありがたさますますかも知れんのう…」

老婆の手にしていた和讃をよくよく見ると、女文字ともいわれる変体がなで、読み仮名と覚書が付記してあった。

「わ、和讃の意味については、次回の縁日のときに詳しくお話しましょう」。海旭は神秘的な顔つきで言って寺の雑務に戻った。

仏門への導きは

「こんにやく閻魔」と老婆

それから数日後、いつものように、夕餉を終えて夜の読経をすませ、すべての片付けを終えると十二時を回っていたが、海旭は睡魔

を追い払って文机に向かった。かたわらには地藏和讃関連の本が数冊積み上げてあった。海旭が得度した日、住職の海定から書齋の本はいつでも自由に持ち出して構わないと言われたのを即実行したのだった。

海旭は、それらと首つびきで、時折り読めない漢字が出てくると辞書をひきひき格闘していたが、やがて筆をとって原稿に向かった。原稿といっても、それは棄てられる運命にあるお布施袋のしやくを開いて裏の白地を代用したものだ。まずは「地藏和讃注解」と冒頭に大書すると、こう書き出した。

「そもそも和讃とは、仏や經典に対して、和語をもつてほめたたえる歌のことある。声明の一種といえよう。ちなみに梵語をもつてほめたたえる歌を〈梵讃〉、漢語をもつてほめたたえるのを〈漢讃〉という。和讃はおおむね七五調である。そのうちもつとも一般に流布しているのが地藏和讃であり、六道で苦しむ衆生を教化・救済する仏の化身たる地藏を

たたえるものである。空也上人がひろめられたと言われている。地藏は、子育て、火付け、盗難除け、病気除けなど庶民のあらゆる願いをかなえてくれる仏として各地につくられ……」

その後には、あまり字が読めない老婆でもわかるように、地藏和讃の一字一句をていねいに読み下し、注釈をほどこした。熨袋の裏紙は、厚さからすると百枚ぐらいになったろうか。

次月の「こんにやく閻魔」の縁日がめぐってきた。海旭が完成した地藏和讃の注釈を手渡してわかりやすく説明をし終えると、老婆は腰を深々と折り曲げて礼をいい、涙ながらに言った。

「こんな有り難い経文だったとは。これで六歳で逝った娘に心のこもった供養ができる……ほれ、わしもこのとおりの年だから、じきにお迎えがきて娘のもとへいくことになるうが、そんなときは、この有り難い経文をたっぷりと娘にも教えてやります。ほんに冥土へのよい土産ができた。小僧さん、ほんとう有り難う」

礼を言いたいのは実は海旭のほうだった。いまから思えば、あのときに仏教の真髄、利他と報恩の大乘精神を直感したのだった。仏の道のすばらしさに気づかされ、生涯この道を歩もうと確信を得たのである。いまでも、別れ際に老婆が両手で拝むように海旭の手を握ったあのぬくもりが忘れられなかった。

(この項づく)

第五十五回

江戸を歩く



本郷へ

森清鑑
大江戸ウォーカ―

本郷へ

白山の日光御成道を本郷に向かって南下する（本郷通り）。右手同心大縄地、左側は勝林寺など寺社が続く。やがて左右ともに同心の大縄地となり駒込追分。白山から来る丸山新道と重なる。左手は水戸中納言の中屋敷（敷地約五万四千坪）。ここが明治になると第一高等学校になる（現東大農学部）。向丘弥生町である。ここで発見された土器が弥生式土器で弥生時代と呼ぶことになる。寮歌「向丘にそそり立つ…」とはここを指す。

加賀上屋敷

水戸の中屋敷に隣接して前田加賀守の上屋敷が始まる。駒込追分から先は現代と同じく本郷通りと呼ばれる。本郷の地名は全国各地にあるが、これは荘園時代の、各荘園の中核の場、支配拠点を意味しているようで、おそらくここもそうであったのだろう、室町から

戦国時代に本郷と呼ばれるようになる。地形的には、この本郷通りが山の尾根のようなもの。いわゆる本郷台地でここを高台として特に東西に谷を形成する。菊坂を初め下り坂が多いのはそのためである。

金沢前田の上屋敷ともなれば広大そのもの。敷地約十萬四千坪。これも明治以降そっくり東大の本校地となる。まもなく本郷通りに面する表御門。いわゆる赤門が左に見える。中に入ると中央やや右手に大きな御殿の母屋が続く。その北に育徳園。贅を凝らした名園である。この庭園の中央に心字池があり、明治以降夏目漱石の小説に基づき三四郎池と呼ばれるようになる。庭園のさらに北側には御貸小屋（藩士の官舎）や御蔵が立ち並ぶ。北の水戸屋敷との端境には牢屋まである。御殿の南には巨大な土蔵があり、周囲は火事除けの十分な敷地を取っている（防災といえは前田家が抱える大名火消しは加賀鷹として勇名を馳せた）。そのまた南は御貸小屋の棟が続く。

本郷散歩図

散歩道 →



◆散歩図

明治になると初期の一時期、御殿から土蔵、御貸小屋までの南部分が前田邸となった（現東大医学部、理学部、東洋文化研究所）

この上屋敷は大阪夏の陣の功績により、幕府から賜ったもの。三代家光の訪問に備え、御殿を整備、新築し、豪華な庭園を造る。これが育徳園である。育徳園の東には御馬場があり、藩主、家来が乗馬訓練。そのまた東には御貸小屋と作事方（建築・修理工事役）の建物。そして上野不忍池近くまで前田の姻戚藩（石川、富山藩）の上屋敷が続く（東大医学部付属病院）。

榊原式部下屋敷

その南は越後高田藩榊原式部十五万石、一万八千坪の下屋敷（明治になると三菱の岩崎久彌邸）。そしてこの下屋敷との端境がさだまさしの歌で有名な無縁坂である。無縁坂の由来は坂に隣接して北にある浄土宗講安寺にある。開山上人が境内に無縁寺と名付けた庵

を建てる。これが不忍池から坂の登り口にあるところから人々は無縁坂と呼ぶようになる。下屋敷東側に真宗教証寺。ここには江戸中期の著名な歌人柳瀬美仲（なつみちゅう）が葬られている。「はつせ路や 初音聞かまく尋ねても まだこもりくの山ほととぎす」（こもりくの＝隠り口の。その中に隠れているような場所。このような山深いところに来たのだからホトトギスよ初音をきかせておくれ）。この歌が有名になり美仲はこもりくの先生と呼ばれるようになった。榊原下屋敷の西南に隣接しているのが、春日の局の菩提寺、麟祥院。麟祥院前の通り（春日通り）を西へ歩くと、加賀上屋敷の南辺を通過し、本郷通りに出る。筋違いに直進し、旗本、御家人屋敷に沿って北に曲がると鎧坂（かぶつちか）、その先は本妙寺坂。これを下ると正面に本妙寺の参道がある。

本妙寺 明暦の大火

日蓮宗本妙寺は加賀上屋敷の表御門、赤門

から御持組（弓隊、鉄砲隊）大繩地を挟んで真西にある。家康の故郷三河国の武将が檀家となり開基。火事と喧嘩は江戸の華で江戸時代、焼失面積の大きな火災が約三十回あったが、最大の火災が明暦の大火（一六五七）で、日本一の豪壮を誇った江戸城天守閣も焼け落ち、二度と造営されることはなかった。この火事は別名振り袖火事。本妙寺が火元とされている。ある振り袖を身にまとった若い女性が次々死に、その悪因縁を振り払おうと本妙寺で焼き捨て供養。折からの強風でまたたくまに火は江戸中をなめ尽くす。この明暦の大火をきっかけに江戸の大改造がおこなわれることになる。本妙寺は開基の名門、本因坊家の菩提寺。明治四十一年豊島巢鴨に移転するまでこの本郷丸山で信心を集めた。したがってこの寺には江戸玄武館の剣豪千葉周作、遠山の金さんこと町奉行遠山金四郎が葬られている。

本郷菊坂町

芭蕉は元禄二年（一六八九）深川から船に乗った。さて、本妙寺坂の西へ下っていく町並みが本郷菊坂町で明治になると文士が集い住む菊坂となった。菊坂を下った左の長屋に（菊坂下町）樋口一葉は十八歳から二十一歳まで住む（その後下谷竜泉寺町に転居）。今でも、一葉が使った井戸ポンプがそのまま使われている。一葉は再びこの地に戻り、菊坂よりやや北の現、西片一丁目（白山通り側）で二十四歳の短い生涯を終える。また菊坂近くにはあの宮沢賢治（菊坂南の炭団坂側）や与謝野寛が次々と一時期移り住む。菊坂の小腹に左より降りてくる急な坂道が炭団坂（たどんざか）で、そのいわれは、昔、炭団を商う者が多く住んでいたとか、あまりにも急なので炭団のように転げ落ちたとか。明治にこの炭団坂上に住んでいたのが坪内逍遙で、ここで「小説神髓」、「当世書生気質」を書き上

げた。さらに、菊坂の北には、徳田秋声旧宅や啄木が一時住み移った場所がある。結局、明治から昭和にかけて、この本郷界隈に夏目漱石、坪内逍遙、樋口一葉、二葉亭四迷、正岡子規、宮沢賢治、川端康成、石川啄木など多くの文人が居を構えた。

阿部正弘下屋敷

菊坂が終わると前方に五万七千坪の阿部伊勢守正弘の下屋敷（西片）が北に広がる。阿部正弘といえは幕末動乱期の老中首座。時あたかも黒船来航とともに開国の嵐。二十五歳にして老中に就き、攘夷派か鎖国派かで国論は真っ二つ。積極的な政策を見いだせないまま、ペリー再来により事態を穏便にまとめる形で日米和親条約を締結。二百年の鎖国政策は終わりを告げる。堀田正睦を老中首座に起用し、身を引く。この間の心労がたたって僅か三十九歳で老中のまま死す。歴史家は彼を優柔不断、八方美人の典型と見るが、その後

の日本を救う具体策を実施している。まず勝海舟、大久保忠寛、高島秋帆、江川英龍（江川太郎左衛門）等を起用し、国防の強化に努めたこと。次いで長崎海軍伝習所（海軍士官養成）、講武所（各種武術砲術、海軍操練所）、洋学所（蕃書調所、洋学研究所、東京大学の前身）などを設立したことである。これらはその後の世を動かす人材を生み出す原動力となる。阿部は一介の藩士、勝麟太郎を世に送り出しただけでも大変な功績がある。彼は人の話をよく聞き、身分を問わず、人材をどうしどし起用したのである。

この阿部下屋敷南門の本郷菊坂田町から西に御家人、旗本宅を縫ってジグザグに行くとすぐに小石川、伝通院の東裏門にたどり着く。

浄土古今百歌・この国の秋

秋きぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかねぬる

藤原敏行

おしなべて物を思はぬ人にさへ心をつくる秋のはつ風

西行

白玉の齒にしみとほる秋の夜の酒はしづかに飲むべかりけれ

若山牧水

馬追虫うまおひの髭のそよろに來る秋はまなこを閉ぢて想ひみるべし

長塚 節

もの言へば声みな透る秋日ざしわれの怒りもはかなくなりぬ

中城ふみ子

ゆく秋の大和の国の薬師寺の塔の上なる一ひらの雲

佐佐木信綱

秋と云ふ生きものの牙夕風の中より見えて淋しかりけり

与謝野晶子

わが抱く思想はすべて金なきに因するごとし秋の風吹く

石川啄木



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では

読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

TVウオッチング、紀行文、その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。

どしどし編集部にお寄せ下さい。

浄土誌上句会



●赤

〔特選〕
すぐ赤くなる耳ふたつ夏帽子

内藤 隼人

恥ずかしがり屋なのだろうか。何かという
とすぐ耳が真っ赤になるのである。よく分
らないが、ほてるなどして自分で分かるのだ
ろうか。麦藁帽子ならともかく、耳を被いよ
うもなからう。

〔佳作〕 赤富士が湖畔に映えて緑濃き

森 懐人

品番で呼ばれ真っ赤なサクランボ

村田 篠

緑陰や赤子の手足よく動く

井村 善也

●羽

〔特選〕
羽蟻の夜喉に貼りつくオブラート

小林 苑を

薬を飲むのに使ったのか、飴などをくるん
であつたのか。飴ならともかく薬だったら苦
い思いをせねばなるまい。ところで取り合わ

せとして置いた季語との関係をどうとらえるか。この辺は読み手に任せておこう。

〔佳作〕

夕闇へ薄羽かげろう消えゆけり

佐藤 雅子

乙女らに羽化の夏あり冷酒酌む

大竹 雅晴

鳥の巣に羽毛が敷かれ雛生まる

石原 新

●自由題

〔特選〕

裸婦像の胸に眩しき新樹光

浜口 佳春

公園だろうか。裸婦の像がすらりと立っている。あたりの木の緑を照らす日に染まるよな、なめらかな肌である。その光を胸に眩しいというが、自分がその胸を眩しく見上げているのだ。新樹光が新鮮である。

〔佳作〕

被りてもとりても暑き帽子かな

工藤 掉

路を煮る柱時計の音の中

山口 信子

金亀虫払えど胸を去らずいる

増田 信子



誌上句会 (編集部選)

■赤

赤腹の飛びゆく林道暮早し
赤とんぼセロハンの羽あやうくて
霧晴れて赤松行けば禅庭花
赤々と造花は咲けり微雨の街
夏木立くねくね真赤な郵便車
一瞬はべろりと赤し夏の火事
赤牛に囲まれている夏夕べ
夕焼けも小焼けも真つ赤通学路
滝壺に赤いサンダル消えにけり

■羽

子雀が幼き羽ばたき巢立ちかな
森 懐人

佐藤雅子
早乙女喜栄子
當間あさ子
長谷川裕
井口 栞
斉田 仁
芦野暢子
芝崎慶三
山崎 徹

浄土誌上句会のお知らせ

兼題

出校自由題

締切・二〇一三年十月二十日

発表・『浄土』二〇一三年十二月号

選者・増田河郎子 (『南風』主宰)

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句(何句でも可)と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

■自由題

へたれ蚊の羽音遠くに寝入りたる
北東へ千鳥羽ばたく初夏の浜
こんこんと男眠りぬ黒揚羽
両腕を開けば羽根や夏休み
王将の羽根付き餃子西鶴忌
なんとなく待つ青鷺の羽ばたきを
空梅雨や孔雀の羽根を壺に挿す
去るものを一羽と数え髪洗う
オニヤンマ休みしときは羽のはす
乙女らに羽化の夏あり遠くあり

空梅雨か芍薬の花色冴えず

夫眠る墓地に来ており慈悲心鳥

ほおずきのあかりたよりの盆の宵

駒草に逢瀬を誓い登る山

参道の往来古き八重桜

梅雨晴れ間橋を渡って来る男

真昼間の浮巣どこにも見つからず

笹の葉がはや枯れている星祭り

炎天の河原にひそむ不発弾

まぶしさの中にまぶたの無いとんぼ

炎天を来て内容のない話

うとうとと薄く息して水中市

遮断機に待つは吾のみ夏茜

森 懐人

佐藤雅子

早乙女喜栄子

當間あさ子

飯島英徳

村松芳郎

芦野暢子

山内桃児

小林苑を

長谷川裕

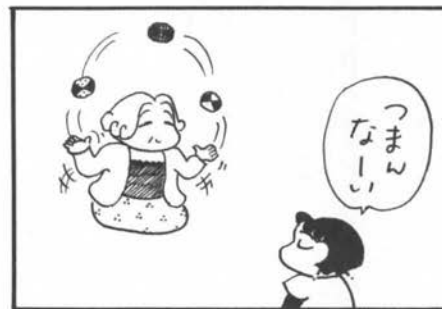
斉田 仁

竹橋哲平

伊藤 弘

さっちゃんはネッ

かまちのひろう



雲さえも食べ物に見ゆる秋の午後 岱潤

釈徹宗さんが講演の中で、「私は寺という所は、世の中の為にも何に役に立たない場所にしよと思っている」と話されていて、びっくりしたことがあります。もちろん釈さんは、世俗的価値観の役に立つとか立たないとか、損とか得とか、敵とか味方とかという二項対立をいったんカッコに入れる所に、寺はあるべきだという意味で話されたことです。言葉って怖いですね。誤解をすることんでもない方向に行ってしまうです。

灘高校の先生が書かれた本の中で、「すぐに役立つことは、すぐに役立つた

くなります」という言葉がありました。

受験校として名高い灘校の国語の先生が、自らの授業では中勘助の『銀の匙』という作品をじっくり読み込んでゆく授業をされていて、模試などは全くやらないのだそうです。余程の信念がないとできません。でもこの言葉お寺の法話にも言えそうです。お寺の法話は、すぐに役立つことなど話さなくていいのです。そんなことはお寺の門を出たらすぐに忘れてしまえます。法話は身体にしみこんで、家に帰ってからふと何度か思い出してもらえるような話がしたいものです。

そのために誤解されないよう言葉に注意して、そしてときどきは「えっ」て

雑誌『浄土』
特別・維持・賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
巖谷勝正(目黒・祐天寺)
魚尾孝久(三島・願成寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
加藤亮哉(五反田・専修寺)
熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
高口恭行(大阪・一心寺)
田中光成(町田・養蓮寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓文(静岡・華陽院)
本多義敬(両国・回向院)
真野龍海(大本山清浄華院)
拙博之(網代・教安寺)
水科善隆(長野・寛慶寺)
宮林昭彦(大本山光明寺)
(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://jodo.ne.jp>

思わせるような価値観のひっくり返った話も必要かと思えます。なんと言っても僧侶にとつて大事なことは、法要と法話なのですから。
(長)

編集スタッフ
編集スタッフ
長谷川岱潤
斎藤光道
佐山哲郎
青木照憲
村田洋一

浄土

七十九巻十月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成二十五年九月二十日

発行 平成二十五年十月一日

発行人 佐藤良純

編集人 大室了皓

印刷所 株式会社 シーティーイー

〒一〇五〇〇一一
東京都港区芝公園四・七 四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三(三)五七八・六九四七
FAX 〇三(三)五七八・七〇三六
振替 〇〇一八〇・八・八二八七

泰雲の

文と写真

浄土真宗東京東本願寺派
光徳寺・平井泰雲尼
茶道歴30年

美味探訪



煙事輕井沢燻製工房

輕井沢

卵かけごはんが、今、ブームのようで、全国的に卵かけごはんのお店が増えているそうです。今回は我が家で贅沢な卵かけご飯がいただける、『煙事』のたまごかけごはんの紹介です。

「燻製醤油・燻製オリーブオイル・燻製黒胡椒・白ごまの燻製、燻製たくわん2／1」のセット。

炊き立てのご飯に卵を割り入れ、一口目は燻製醤油を少々で香ばしい風味。二口目は燻製オリーブオイルを1～2滴濃厚なコク、三口目は燻製黒胡椒を一振りして洋食に変身、四口目は白ごま燻製そして燻製たくわんととの相性と、いろいろな味を楽しめます。

『煙事』は、有名料理人くまさんこと奥水治比古氏とマダムのみはるさんが経営している赤坂の『煙』の姉妹店。『煙』は名のとおり燻製のお店。輕井沢の「煙事燻製工房」で生まれる燻製は、素材自体が本来もつ豊かな旨味を引き出す一つの方法、わずかな『塩』、緩やかな干し『風』、冷たい『煙』それだけと奥水治比古氏は説明されています。

赤坂『煙』は、クリントン元大統領やフレンチの鬼才が絶賛しています。料理とお酒のマリアージュのお店で、21世紀に残したい料理と称されています。

何か特別の日には是非再訪したい最高のお店です。

注文先

煙事輕井沢燻製工房

389-0111 長野県北佐久郡輕井沢町長倉中山628-9

Tel/Fax 0267-44-6100 営業時間 10:00～20:00

定休日 木曜日

オンラインショップ www.kazenoshiwaza.com から注文できます。

☆たまごかけごはんセット 4200円



新

刊

案

内

関東十八檀林 ガイドブック

いまよみがえる関東巡礼の旅



江戸時代に浄土宗僧侶の養成を目的として選定、創建された十八の古刹や名刹がついに一冊の本になりました。単立寺院となった二か寺を含む関東各地の十八の寺院を取材、その歴史から今に伝わるエピソード、さらにお寺巡りや団体参拝に役立つ周辺の見所や食事処、加えて詳細なアクセスマップに各寺院の基本情報も掲載された手元に置いておきたい待望の一冊です。また、巻末には江戸時代に十八檀林参拝の様子を記した摂門の『檀林巡路記』の現代語訳抄も掲載されています。

《十八檀林》

東	京	増上寺	傳通院	幡随院	靈巖寺	靈山寺	大善寺
千	葉	大巖寺	東漸寺		群馬	善導寺	大光院
茨	城	大念寺	常福寺	弘経寺(瓜連)	弘経寺(結城)		
埼	玉	浄国寺	勝願寺	蓮馨寺		神奈川	光明寺

発行：関東十八檀林霊場会
A5版／カラー96頁
：800円（税込）

※本誌のお求めは、
法然上人讃仰会 電話03-3578-6947 Fax03-3578-7036
または各檀林寺院、浄土宗文化局でもお求めいただけます。